

タイトル：単純過去の主観的用法とイストワールの起源

著者：平塚 徹

要旨：

通説では単純過去は客観的な語りにおいて使用される時制だとされてきた。しかし、実際には、単純過去の文でありながら、特定の視点からの知覚の内容を表していて、客観的な事実ではないという場合がある。また、内容が夢、幻覚、誤認である場合もある。このことは、単純過去がイストワールの時制だという考えを疑問に付すものである。

バンヴェニストがディスクールとイストワールという区別を提唱して以来、この両者は互いに相容れない二項対立として捉えられてきた。しかし、台詞や後日談のようなディスクールの中で語りに入っていくと、イストワールの時制とされてきた単純過去が用いられるのである。これは、小説の客観的な語りである典型的なイストワールではない。しかし、ここに、イストワールの起源が再現されている。ディスクールの中から「語り」が生まれ、特に書かれた「語り」において、次第に聞き手や語り手が背景化し、コミュニケーション的な性質が希薄化して行った極限がイストワールなのである。

ディスクールの中で語りに入っていく、語りを終えるとディスクールに戻る。これが独立して語りの部分が発展すると、小説において見られる、冒頭がディスクール、本体がイストワール、終結部がディスクールというテキストになる。そして、ここから本体のみが独立すれば、全体がイストワールのみからなるテキストとなるのである。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

平塚徹（2022）「単純過去の主観的用法とイストワールの起源」阿部宏（編）『語りと主観性—物語における話法と構造を考える』東京：ひつじ書房，pp.3-20.

単純過去の主観的用法とイストワールの起源

平塚 徹

1. はじめに

フランス語は時制の多い言語であり、過去時制においても、複合過去、半過去、単純過去などの時制がある。複合過去は、英語の現在完了と同じく、所有を表す動詞（あるいは繫辞）に由来する助動詞と過去分詞から作られる時制であり、本来は現在完了を表したが、過去も表すようになっていく。半過去は未完了相の過去を表す。単純過去は、書き言葉で用いられる完了相の過去時制であり、現在とは関係のない過去の出来事を客観的な事実として述べる時制だと説明されている。

通説では、自由間接話法には、単純過去は現れず、半過去が特徴的な時制だとされている。Ducrot (1980: 58) は、単純過去の自由間接話法も可能だとしたが、Vuillaume (1998) は反論を展開し、元の発話に単純過去が含まれでもしない限りは、自由間接話法には単純過去は現れえないとした。いわゆる「知覚の自由間接話法」においても、やはり、半過去が使用されるというのが定説である。そのため、時制が単純過去から半過去に移行すると、語りから自由間接話法への移行の印となりうる (Vuillaume 2000: 117)。これは、知覚の自由間接話法でも同じである (Banfield 1981: 66; 田原 2013)。例えば、次の例では、1文目の *regarda* (見た) は単純過去で語りになっているが、2文目の *étaient couverts* (覆われていた) と3文目の *Il y avait* (あった) は半過去で、ジャンが見たものとして解釈できる¹。

- (1) Jean regardaⓂ dans la chambre par la fenêtre. Les murs étaientⓂ couverts de tableaux. Il y avaitⓂ un lustre au plafond.

ジャンは窓から部屋の中を 見たⓂ。壁は絵に覆われて いたⓂ。

天井にはシャンデリアがあった④。

逆に、単純過去は客観的な語りであり、知覚の自由間接話法には用いられないとされている。一見、単純過去が知覚を表していると考えられる場合においても、基本的には客観的な描写であり、それが登場人物の知覚の内容とも解釈されうるだけで、知覚の自由間接話法とは異なるものとされる。

例えば、この議論で多くの研究者に取り上げられてきた次の例を見てみよう。

(2) Un matin, avant le jour, le Tétrarque Hérode-Antipas vint④ s'y accouder, et regarda④.

Les montagnes, immédiatement sous lui, commençaient④ à découvrir leurs crêtes, pendant que leur masse, jusqu'au fond des abîmes, était④ encore dans l'ombre. Un brouillard flottait④, il se déchira④, et les contours de la mer Morte apparurent④. L'aube, qui se levait④ derrière Machærous, épandait④ une rougeur.

(Flaubert, *Hérodias*, p.140)

ある朝、日の出前に、四分領主ヘロデ・アンティパスはそこに行き④、肘をついて眺めた④。

すぐ下では、山々が頂を見せはじめていた④が、その山体は、谷の底の方まで、まだ闇の中にあった④。霧が漂っていた④が、それが裂けて④、死海の縁が現れた④。マケルス城の背後から登る④朝日が、赤みがかった色を広げていた④。

第一段落の最後でヘロデ・アンティパスが眺めたとあり、第二段落の *commençaient* (始めていた)、*était* (あった)、*flottait* (漂っていた) という半過去を含む文は、彼が見た景色として解釈される。そして、次の *se déchira* (裂けた)、*apparurent* (現れた) も、彼が見た景色であるように解釈できる。しかし、これらの動詞は単純過去なので、語りのはずだと考えられてきた。そのため、多くの研究

者が、この部分が知覚内容として解釈されるのは文脈によるものとして説明しようと試みてきた²。しかし、半過去が知覚内容を表すのも、文脈に依存した現象である。例えば、次の例を考えてみよう。

- (3) Il entra④ dans la salle et regarda④ un peu partout. Il y avait④ une bague sur la table.

彼は部屋に入り④、あちこち見た④。テーブルの上に指輪があった④。

ここでは、彼があちこち見たと述べた後で、「テーブルの上に指輪があった」と半過去で述べている。ここまでだと、この部分は彼の見た情景を表す知覚の自由間接話法と解釈することができる。しかし、その後、以下のように続けたらどうであろうか。

- (4) Mais, il ne la remarqua④ pas.

しかし、彼はそれ（指輪）に気がつかなかった④。

この場合、「テーブルの上に指輪があった」というのは、彼の知覚内容ではなく、客観的な状況であったことになる。つまり、半過去が知覚内容を表すという解釈はキャンセル可能なのである。このことは、知覚の自由間接話法は半過去という時制形式の機能ではなく、文脈との相互作用により生ずる解釈であることを示している。これは、単純過去の文が知覚内容と解釈される場合と根源的には同じである。ならば、単純過去による知覚の自由間接話法を認めて良いのではないだろうか。

本稿では、まず、単純過去は必ずしも客観的な時制ではなく、主観的な内容を表す場合もあることを見ていく。そして、ディスクールとイストワールの伝統的な二項対立を見直して、イストワールがディスクールの中から生じた語りの極限の姿であることを主張する。

2. 単純過去の主観的用法

2.1. 視点

Banfield は、単純過去を用いた語りは嘘たりえないと主張している。これは、一人称の語りであっても同じである (1982: 263)。一人称の語りにおいては、半過去の文は語り手の過去の経験を表すが、単純過去にはそのような含意はないとする。ただし、経験されている可能性は排除されないとする (1981: 67)。このように考えれば、単純過去で述べられている内容が登場人物の知覚内容と一致していたとしても、それは飽くまでも語りであるという主張とは矛盾しない。

しかし、Sthioul (2000: 80) も述べている通り、状況や出来事などの視点から描いているかは、複雑な語用論的プロセスを経て決まり、時制とは間接的にしか関係していない。そして、単純過去であっても誰かの視点からの描写でありえる。

2.1.1. 視点の移動

まず、視点が移動している場合を取り上げる

(5) La route sortit④ de la forêt.

(Vailland, *325000 francs*, in Sthioul 1998: 218)

道路は森から 出た④。

ここでは、「道路は森から出た」と単純過去で述べられている。しかし、実際に森から出たのは道路ではなく、道路を移動していた人である。つまり、これは客観的な事実ではなく、道路をたどって森から出た人の視点から見た描写である。同様に次の例を見られたい。

(6) Enfin le navire partit④ ; et les deux berges, peuplées de magasins, de chantiers et d'usines, filèrent④ comme deux larges rubans que l'on déroule.

(Falubert, *L'Éducation sentimentale*, p.1)

ついに、船は出発した④。そして、倉庫、資材置場、工場で
いっぱいの両岸が幅の広い二本のリボンを広げるように動
いていった④。

両岸が動いていったと単純過去で述べられているが、動いているの
は、両岸ではなく、船の方である。これも船から見た情景の描写で
ある（Ducrot 1984: 209-210, Sthioul 1998: 201）³。

2.1.2.視線の方向転換

Sthioul は、次の二つの文を比較している。

- (7) Paul leva④ les yeux. Un monstre effroyable se tint④
devant lui.(Sthioul 2000: 90)

ポールは目を上げた④。恐ろしい怪物が彼の前にいた④。

- (8) Paul leva④ les yeux. Un monstre effroyable se tenait④
devant lui.(*ibid.*)

ポールは目を上げた④。恐ろしい怪物が彼の前にいた④。

ポールの前に恐ろしい怪物がいたことを、(7)では単純過去で、(8)
では半過去で述べている。彼が目を上げる前から怪物はそこにいた
ことが明らかな文脈においては、(8)の半過去は両方の事態の時間
関係から説明される。しかし、(7)の単純過去の場合、文脈と整合
的に解釈するには、二つ目の文は怪物がいるとポールが意識したこ
とを表していると解釈しなければならない。このように、単純過去
であっても、文脈との相互作用により、登場人物の視点からの描写
となりうるのである。

2.1.3.視点への移動

直示動詞 venir（来る）は、視点人物への移動を表している。

- (9) Pendant qu'il dînait④, des Allemandes à figures busquées, basanées comme des Bohêmes, avec des jupons courts et des béguins d'Alsaciennes, vinrent ④ piauler piteusement devant sa table un lieder lamentable en s'accompagnant du violon et autres instruments disgracieux.

(Théophile Gautier, *La Toison d'or*, p.198)

彼が夕食をしている④と、ボヘミアンのように曲がった褐色の顔をして、短いペチコートとアルザス女がする顎紐付きの帽子を身につけたドイツ女たちが、彼のテーブルの前に来て④、ぶざまなバイオリンやその他の楽器の伴奏で酷いリートをうやうやしく甲高い声で歌った。

彼が夕食をしていると、ドイツ女たちが彼のテーブルの前に来たという描写である。ここで、vinrent（来た）は単純過去だが、彼の視点からの描写である。次の例も同様である。

- (10) une fort jolie créole vint④ même s'asseoir près de lui et [...] (*ibid.*)

たいそうきれいなクレオール（西インド諸島生まれの白人）の女が、彼のそばに座りに来④さえした。

このように、単純過去であっても、純粹に客観的な語りではなく、登場人物の視点から見た描写になるのである⁴。

2.2. 非事実

2.2.1. 夢

夢の記述では、半過去がよく用いられ、単純過去の使用は少ない。これは、一見、夢は個人によって見られる主観的な経験であることから説明されると思われるかもしれない。しかし、次の例では、夢の記述に単純過去が用いられている。

(11) Il fit④ les rêves les plus blonds du monde.

Les nymphes et les figures allégoriques de la galerie de Médicis dans le déshabillé le plus galant vinrent④ lui faire une visite nocturne ; [...] (*idem*, p.199)

彼は世界でも極めてブロンド色の夢を見た④。

メディシスの間のこの上なく艶っぽいネグリジェを着たニンフや寓意的表象が彼を夜に訪ねて来た④。

夢の記述で半過去が用いられやすいのは、夢が断片的なイメージの連続だからである。しかし、夢であっても、ストーリーが整えられると、単純過去も用いられるのである⁵。

2.2.2.幻覚

単純過去で語られている事柄が客観的事実であるとは断言できない場合がある。

(12) J'ouvris④ mon missel, et je commençai④ à lire des prières ; mais ces lignes se confondirent④ bientôt sous mes yeux ; [...]

(Théophile Gautier, *La Morte amoureuse*, p.88)

私は祈祷書を開いて④、祈りの言葉を読み始めた④。しかし、行が目の前で混じった④。

前半の「私は祈祷書を開いて祈りの言葉を読み始めた」という内容から、後半の「行が目の前で混じった」という内容は語り手が見た情景を表していると解釈される。この場合、この単純過去で述べられた情景は、幻覚かもしれない。

単純過去で述べた事柄が事実かどうか語り手自ら自問する場合もある。

- (13) Comme je m'arrêtais④ à regarder un *géant des batailles*, qui portait④ trois fleurs magnifiques, je vis④, je vis④ distinctement, tout près de moi, la tige d'une de ces roses se plier, comme si une main invisible l'eût tordue, puis se casser, comme si cette main l'eût cueillie ! Puis la fleur s'éleva④, suivant une courbe qu'aurait décrire un bras en la portant vers une bouche, et elle resta④ suspendue dans l'air transparent, toute seule, immobile, effrayante tache rouge à trois pas de mes yeux.

Eperdu, je me jetai④ sur elle pour la saisir ! Je ne trouvai④ rien; elle avait disparu⑤. Alors je fus pris④ d'une colère furieuse contre moi-même; car il n'est pas permis④ à un homme raisonnable et sérieux d'avoir de pareilles hallucinations.

Mais était④ -ce bien une hallucination ? [...]

(Guy de Maupassant, *Le Horla*, p.36)

見事な花を三輪 つけた④「戦いの巨人」[バラの栽培品種]を見ようと 立ち止まっていた④時、私は 見た④、はっきりと 見た④。私のすぐ近くで、そのバラの一輪の茎が見えない手で捻られるように曲がり、そしてその手によって摘まれるように折れるのを！そして花は、腕がそれを口へと持っていく時に描くであろう曲線に沿って 上がって行き④、透明な空気の中で宙ぶらりんのまま とどまった④。それだけで動くことなく、私のすぐ目の前で恐ろしい赤い斑点となっていた。

私は取り乱して、それに 飛びかかって④、つかもうとした！何も なかった④。花は消えていた⑤。私は自分自身に対する激しい怒りに 襲われた④。というのも、このような幻覚にとらわれることは、理性的で真面目な人間には 許されない ことだ④からだ。

しかし、あれは本当に幻覚 だった④のか。

語り手は一輪のバラの花が空中を動いたことを単純過去で述べる

が、その後、その花の動きを幻覚と言い、また、本当に幻覚かと自問している。ここでは、単純過去で述べられた事柄は客観的な事実かどうか分からず、語り手が見た情景である。

2.2.3. 誤認

平塚（2017: 40）では、単純過去で述べられた事柄が事実とは異なる知覚内容であることを明示的に示す作例を上げた。

- (14) Jean regarda④ dans la chambre par la fenêtre. Les murs étaient④ couverts de tableaux. Il y avait④ un lustre au plafond. Soudain, la porte s'ouvrit④ et un homme entra④. Non, ce n'était④ pas un homme, mais une femme déguisée en homme.

ジャンは窓から部屋の中を見た④。壁は絵に覆われていた④。天井にはシャンデリアがあった④。突然、ドアが開き④、男が一人入ってきた④。いや、それは、男ではなく、男装した女だった④。

ここでは、「男が一人入ってきた」と単純過去で述べているが、その後、「いや、それは、男ではなく、男装した女だった」と否定している。そうすると、単純過去で述べられた「男が一人入ってきた」というのは、その時点でのジャンの思い込みに過ぎなかったということになる。

次の例は、マンガの一人称の語りである。

- (15) Il était 3 h 14 lorsque je me réveillai④ ; ou plutôt lorsque je crus④ me réveiller, car je fixai④ soudain le plafond avec horreur : il n'y avait④ plus de plafond !..

(Marc-Antoine Mathieu, *Le Processus*, p.23)

目が覚めた④時、3時14分だった。というより、目が覚めたと思っった④時だった。というのは、私は突然恐怖とともに

天井を見つめた㊦からだ。天井がなかったのだ㊦！

ここでは、目が覚めたことを単純過去で述べている。しかし、その後すぐに、目が覚めたと思ったと言い直し、その根拠を説明している。つまり、単純過去で述べられている事柄であっても、客観的な描写ではなく、その時の思い込みたり得るのである。

三人称の語りでも、同様の例を作ることができる。

(16) Il se réveilla㊦. Ou plutôt, il crut㊦ se réveiller. Car, en fait, il rêvait㊦ toujours.

彼は目が覚めた㊦。というより、目が覚めたと思った㊦。というのは、実は、彼はまだ夢を見ていた㊦からだ。

彼は目が覚めたと単純過去で述べているが、それは思い込みだったと続けることができる。

2.3. まとめ

単純過去で述べられていても、登場人物の視点からの描写である場合もあるし、客観的事実とは異なる場合もある。このように単純過去は必ずしも客観的な語りであるとは言えない。このことは、単純過去がイストワールの時制であるという考えも疑問に付すものである。

3. イストワールの起源

3.1. ディスクールとイストワール

バンヴェニスト (1983: 223) はディスクールとイストワールという区別を導入した。ディスクールにおいては、話し手が聞き手に話をしている。そのため、話し手を指す一人称代名詞「わたし」、聞き手を指す二人称代名詞「あなた」、発話の時や場所を指す「いま」・

「ここ」のような表現が現れる。それに対して、イストワールにおいては、そのようなコミュニケーション構造が排除されており、「わたし」・「あなた」・「いま」・「ここ」は現れない。そして、バンヴェニストは、現在や複合過去をディスクールの時制とし、単純過去をイストワールの時制だとした。

イストワールの典型は歴史叙述であるが、単純過去で書かれた三人称小説もイストワールである。しかし、一人称小説であっても、単純過去で書かれていれば、コミュニケーション構造が排除されていると Banfield は考えている。単純過去はイストワールの指標の中でも最も顕著なものと言って良い。

小説の全体がディスクールになっている場合もあれば、イストワールになっている場合もある。しかし、実際には、両者が混じり合っている場合も多い（西村 2015）。ディスクールで始まり、イストワールに移行していくパターンも見られる。また、イストワールの後にディスクールで締めくくられるパターンもある。そして、イストワールがディスクールに挟まれているパターンも見られる。これは、映画に喩えれば、語り手が思い出を語っている映像から始まり、回想シーンに切り替わり、最後に語り手の映像に戻るのと同様の効果をもたらすものであろう。

3.2. 複合過去から単純過去への移行

ディスクールとイストワールは互いに相容れない二項対立として捉えられてきた。しかし、この区別は截然としたものではない⁶。例えば、『星の王子さま』は語り手の回想から始まり、複合過去を用いているが、単純過去に切り替わっていく。しかし、その移行は、一気に起こるのではなく、複合過去と単純過去を行ったり来たりするのである。

次は『星の王子さま』の第2章冒頭である。

(17) 【語り手の乗った飛行機が故障し、砂漠に不時着する】

J'ai ainsi vécu^複 seul, sans personne avec qui parler

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

véritablement, jusqu'à une panne dans le désert du Sahara, il y a six ans. Quelque chose s'était cassé dans mon moteur. Et comme je n'avais avec moi ni mécanicien, ni passagers, je me préparai④ à essayer de réussir, tout seul, une réparation difficile. C'était pour moi une question de vie ou de mort. J'avais à peine de l'eau à boire pour huit jours.

Le premier soir je me suis donc endormi⑤ sur le sable à mille milles de toute terre habitée. J'étais bien plus isolé qu'un naufragé sur un radeau au milieu de l'océan. Alors, vous imaginez ma surprise, au lever du jour, quand une drôle de petite voix m'a réveillé⑤.

(Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, p.15)

私は本当に話ができる相手がいないまま、六年前のサハラ砂漠での「飛行機の」故障まで孤独に生きた⑤。モーターの中で何かが壊れたのだ。整備士も乗客もいなかったのだ、私はたった一人で難しい修理をなんとかやってのける覚悟をした④。

最初の晩、私は人が住んでいるあらゆる土地から何千マイルも離れた砂の上で眠り込んだ⑤。私は大海原の真ん中で筏に乗っている遭難者よりもはるかに孤独だった。だから、私が夜明けに変な小声で起こされた⑤時にどんなに驚いたか想像できるでしょう。

最初の「孤独に生きた」は複合過去だが、次の「修理する覚悟をした」は単純過去が使われる。しかし、その次の「眠り込んだ」からはしばらく複合過去が続く。その後、単純過去に切り替わるが、一度だけ複合過去に戻る。

(18) Comme je n'avais jamais dessiné un mouton je refis④, pour lui, l'un des deux seuls dessins dont j'étais capable. Celui du boa fermé. Et je fus stupéfait④ d'entendre le petit bonhomme me répondre :

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

« Non ! Non ! Je ne veux pas d'un éléphant dans un boa.
Un boa c'est très dangereux, et un éléphant c'est très
encombrant. Chez moi c'est tout petit. J'ai besoin d'un
mouton. Dessine-moi un mouton. »

Alors j'ai dessiné④.

Il regarda④ attentivement, puis :

« Non ! Celui-ci est déjà très malade. Fais-en un autre. »

Je dessinai④ :

(Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, pp.16-18)

私は羊の絵を描いたことがなかったので、描くことのできる
たったふたつの絵のうちのひとつを描いてあげた④。そして、男の子がそれに対して私に言うことばを聞いて、びっくりした④。

「違う！違う！大蛇に呑み込まれた象なんていないよ。
大蛇はとても危険だし、象はとても場所をとる。うちはとても
小さいんだ。羊が必要なんだ。羊を描いて。」

そこで、私は絵を描いた④。

彼は注意深く見て④、こう言った。

「違う！この羊は重い病気にかかっている。他のを描いて。」

私は絵を描いた④。

このように、回想から語りへと移行していく過程で、複合過去と単
純過去を行き来している。Vassant (1981) は、このような例におい
ては複合過去と単純過去は自由交替していると述べている⁷。実際、
両方の時制が並列して用いられることもあり、その場合には違いを
認めることは難しい。

(19) Je suis sorti④ et refermai④ la porte derrière moi.

(GARY, *Au-delà*, 221, in 朝倉: 377)

私は外に出て④、ドアを閉めた④。

(20) En 1944, les Américains sont arrivés④ et les avions
allemands revinrent④ bombarder la région.

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

(SAGAN, *Réponses*, 30, in 朝倉: 377)

1944 年、アメリカ軍が到着し^⑥、ドイツ軍機がその地域を爆撃しに戻った^⑦。

ディスクールとイストワールは截然と区別されるものではなく、むしろ連続的なものではないかと考えられる。典型的なディスクールでは複合過去が用いられ、典型的なイストワールでは単純過去が用いられる。しかし、ディスクールとイストワールの間の連続体の部分では、両者とも用いられるのである。

3.3. 台詞

伝統的には、小説の地の文がイストワールであっても、台詞はディスクールであるとされている。しかし、小説の台詞の中に単純過去が出てくる場合がある。

(21) 【オノレ・シュブラックが私に話している台詞の一部。自分の姿を消す能力を身に付けた経緯を語る。】

J'ai exercé^⑥ pour la première fois cette faculté instinctive, il y a un certain nombre d'années déjà. J'avais^⑦ vingt-cinq ans, et, généralement, les femmes me trouvaient^⑧ avenant et bien fait. L'une d'elles, qui était^⑨ mariée, me témoigna^⑩ tant d'amitié que je ne sus^⑪ point résister. Fatale liaison !... Une nuit, j'étais chez ma maîtresse. Son mari, soi-disant, était parti pour plusieurs jours. Nous étions^⑫ nus comme des divinités, lorsque la porte s'ouvrit^⑬ soudain, et le mari apparut^⑭ un revolver à la main. [...] Cette bienheureuse faculté, qui ressortit^⑮ au mimétisme, je l'ai conservée^⑯ depuis. Le mari, ne m'ayant pas tué, a consacré^⑰ son existence à l'accomplissement de cette tâche. Il me poursuit^⑱ depuis longtemps à travers le monde, et je pensais^⑲ lui avoir

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

échappé en venant habiter à Paris. Mais, j'ai aperçu⑩ cet homme, quelques instants avant votre passage. [...]

(Apollinaire, *La Disparition d'Honoré Subrac*, pp.188-189)

私は、もう何年も前にこの本能的な能力を初めて使った⑩。私は 25 歳だった⑨。そして、たいてい、女性たちに感じがよく美男子だと思われていた⑨。彼女たちの一人が、人妻だった⑨が、私にかなりの好意を示して来た⑨ので、拒めなくなった⑨。いつもの情事だ！……ある夜、私はその女の家にいた⑨。夫が何日もの予定で出かけたということだった。私たちは神々のように裸でいた⑨時、ドアが突然開いて⑨、夫が拳銃を手に現れた⑨。[…] この擬態に似た⑩都合の良い能力を、それ以来私は持ち続けた⑩。私を殺せなかった夫は、この使命を果たすことに生涯を捧げた⑩。彼はずっと以前から私を世界中追いかけて⑩、そして、私はパリに住み着いて彼から逃れたと思っていた⑨。しかし、君が通る少し前にあの男を見かけたのだ⑩。

最初は複合過去だが、姿を消す能力を身に付けた経緯を語り始めると、単純過去に切り替わる。しかし、その後の現状につながる話では、複合過去に戻る。台詞はディスクールで、単純過去はイストワールの時制であるとする、ここでの単純過去の使用は説明できない。台詞であっても、語りに入っていくと、単純過去の使用が可能になっていくと考えるべきである。

台詞の途中で出来事を語り始めると単純過去に切り替わり、語り終わると複合過去に戻るのは、冒頭がディスクールで始まり、本体部分のイストワールに移行し、最後にディスクールに戻る小説と相似形になっている。後者は前者が独立して発展したものとして捉えることができる。そうだとすると、イストワールは、ディスクールの中での語りに起源があると考えることができる。

3.4. 伝聞

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

次はアポリネール『異端教祖』の最後で、異端教祖ベネデット・オルフェイが死んだ後の後日談である。

- (22) Un prêtre qui avait beaucoup connuⒶ Benedetto Orfei, et qui avait souvent essayéⒶ de lui faire abjurer ce que les catholiques appelaientⓂ ses erreurs, m'a racontéⓂ la fin de l'hérésiarque. Il mourutⓂ, à ce qu'il semblaⓂ, des suites d'une indigestion, mais son corps fut trouvéⓂ tout couvert de plaies résultant des tortures qu'Orfei s'imposaitⓂ ; si bien que les médecins hésitèrentⓂ à attribuer son décès à sa gourmandise ou à ses mortifications. La vérité estⓂ que l'hérésiarque étaitⓂ pareil à tous les hommes, car tous sontⓂ à la fois pécheurs et saints, quand ils ne sontⓂ pas criminels et martyrs.

(Apollinaire, *L'Hérésiarque*, p.75, l.6)

ベネデット・オルフェイをよく知っていてⒶ、彼にカトリック教徒たちが彼の過ちと呼んでいたⓂものを放棄させようとしばしば試みたⒶ司教が、その異端教祖の最後を私に話してくれたⓂ。彼は消化不良の後遺症で死んだⓂと思われたⓂが、彼の体はオルフェイ自身が自らに課していたⓂ苦行による傷跡で覆い尽くされた状態で発見されたⓂ。そのため、医師たちは、彼の死因を大食とすべきか、苦行とすべきか迷ったⓂ。実は、異端教祖は全ての人間と似ていたⓂのであるⓂ。というのも、人は皆、犯罪者にして殉教者でなけれⓂば、つみびとであると同時に、聖人でもあるⓂからだ。

語り手が異端教祖の後日談を聞いたことが複合過去で述べられるが、その内容は単純過去で語られている。ここで興味深いのは、伝聞で必ずしも確実でない話を単純過去で語っていることである。つまり、客観的な真実というわけではないのである。ディスクールの中で、語りに入っていくと、確実な真実でなくても、単純過去が使用されるのである。

4. まとめ

通説では単純過去は客観的な語りにおいて使用される時制だとされてきた。しかし、実際には、単純過去の文でありながら、特定の視点からの知覚の内容を表していて、客観的な事実ではないという場合がある。また、内容が夢、幻覚、誤認である場合もある。このことは、単純過去がイストワールの時制だという考えを疑問に付すものである。

バンヴェニストがディスクールとイストワールという区別を提唱して以来、この両者は互いに相容れない二項対立として捉えられてきた。しかし、台詞や後日談のようなディスクールの中で語りに入っていくと、イストワールの時制とされてきた単純過去が用いられるのである。これは、小説の客観的な語りである典型的なイストワールではない。しかし、ここに、イストワールの起源が再現されている。ディスクールの中から「語り」が生まれ、特に書かれた「語り」において、次第に聞き手や語り手が背景化し、コミュニケーション的な性質が希薄化して行った極限がイストワールなのである。

ディスクールの中で語りに入っていく、語りを終わるとディスクールに戻る。これが独立して語りの部分が発展すると、小説において見られる、冒頭がディスクール、本体がイストワール、終結部がディスクールというテキストになる。そして、ここから本体のみが独立すれば、全体がイストワールのみからなるテキストとなるのである。

¹ 例文中の動詞の時制を略記した。㊦：単純過去、㊧：半過去、㊨：複合過去、㊩：現在、㊪大過去。

² Nølke et Olsen (2003: 78-79) は、単純過去の知覚内容としての解釈は、アンティパスという目撃者が出てきているために可能になっているとしている。東郷 (2010: 22-23) は、知覚動詞による談話的効果によるものとしている。Lescano (2012: 10-11) は、単純過去の *apparent* (現れた) は、見えるようになったことだけを表し

ており、アンティパスが見たということと組み合わせさせて、アンティパスがそれを見たと感じるとしている。田原(2016: 287-289)は、視覚を導入する動詞 *regarder* (眺める) があるためとしている。赤羽(2016: 366)は、本来の語りと表出された知覚の間に相互浸透が起きているとしている。

³ (6) の *Enfin le navire partit*. も客観的な語りではなく、主観性を帯びている (Ducrot 1984: 209-210, Matsuzawa 2009)。

⁴ 過去の語りに現れる *venir* などの直示動詞については、阿部(2014: 415-417)も参照されたい

⁵ 夢の記述における時制については田口(2001)を参照されたい。

⁶ ジュネットもディスクールとイストワールの区別が絶対的ではないと述べている (Genette 1983: 66-67 [ジュネット 1985: 103-105])。

⁷ 『星の王子さま』第2章における複合過去と単純過去の行き来について、二川(1996)、横井(2009)、西村(2015: 174)、赤羽(2018: 15-17)が論じているが、個々の箇所での時制の選択について説明するのは困難である。

例文出典

Apollinaire, Guillaume. *L'Hérésiarque et Cie*. Paris : Éditions Stock.

Flaubert, Gustave. *Trois contes*. Paris : Garnier Frères.

Flaubert, Gustave. *L'Éducation sentimentale*. Paris : Garnier Frères.

Gautier, Théophile. *Contes et récits fantastique*. Paris : Librairie Générale Française.

Mathieu, Marc-Antoine. *Le Processus*. Paris : Delcourt.

Maupassant, Guy de. *Le Horla*. Paris : Librairie Générale Française.

Saint-Exupéry, Antoine. *Le Petit Prince* : Gallimard.

参考文献

- 阿部 宏 (2014) 「過去の語りに潜在する「わたし」・「いま」・「ここ」」
春木 仁孝・東郷 雄二 編『フランス語学の最前線 2【特集】
時制』 pp.401-430, ひつじ書房
- 赤羽 研三 (2016) 「語りの言語とは何か? -自由間接文体から出発して」
東郷 雄二・春木 仁孝 編『フランス語学の最前線 4【特集】
談話、テクスト、会話』 pp.341-379, ひつじ書房
- 朝倉 季雄 (2002) 『新フランス文法事典』 白水社
- Banfield, Ann. (1981) Reflective and Non-Reflective
Consciousness in the Language of Fiction. *Poetics Today*
2 (2) : pp. 61-76. Duke University Press.
- Banfield, Ann. (1982) *Unspeakable sentences: narration and
representation in the language of fiction*. Boston:
Routledge & Kegan Paul.
- バンヴェニスト, エミール (1983) 『一般言語学の諸問題』 みすず書
房 [Émile Benveniste. (1966) *Problèmes de linguistique
générale*. Paris: Gallimard]
- Ducrot, Oswald. (1980) Analyses pragmatiques. *Communications*
32 : pp. 11-60. Seuil.
- Ducrot, Oswald. (1984) *Le dit et le dire*. Paris: Minuit.
- 二川 佳巳 (1996) 「複合過去と単純過去の地の文における混在の問題
-『星の王子さま』を使って」『Lingua』 7: pp.45-61. 上智
大学一般外国語主事室
- Genette, Gérard. (1983) *Nouveau discours du récit*. Paris: Seuil.
[ジェラルール・ジュネット (1985) 『物語の詩学-続・物語
のディスクール』 水声社]
- 平塚 徹 (2017) 「自由間接話法とは何か」平塚 徹 編『自由間接話法と
は何か-文学と言語学のクロスロード』 pp.1-48, ひつじ書房
- Lescano, Alfredo. (2012) Le passé simple n'est jamais subjectif.
Travaux neuchâtelois de linguistique 56 : pp. 61-76.
Institut des sciences du langage et de la communication,
Université de Neuchâtel.

- Matsuzawa, Kazuhiro. (2009) La génétique et l'herméneutique : Le cas du début de *L'Éducation sentimentale* : « Enfin le navire partit ». *Balzac, Flaubert : La genèse de l'œuvre et la question de l'interprétation*, pp. 125-135. Graduate School of Letters, Nagoya University.
- 西村 淳子 (2015) 『フランス語時制論-発話行為のテキスト言語学』 春風社
- Nølke, Henning et Michel Olsen. (2003) Le passé simple subjective. *Langue française* 138 : pp. 75-85. Larousse.
- Sthioul, Bertrand. (1998) Temps verbaux et point de vue. Jacques Moeschler. (ed) *Le temps des événements : pragmatique de la référence temporelle*, pp. 197-220. Paris: Kimé.
- Sthioul, Bertrand. (2000) Passé simple, imparfait et sujet de conscience. *Cahiers Chronos* 6 : pp. 79-93. Amsterdam/Atlanta: Rodopi.
- 田口 紀子 (2001) 「フィクションとしての「夢」の語り-フランス・リアリズム小説を中心に」『京都大学文学部研究紀要』 40: pp.27-67. 京都大学
- 田原 いずみ (2013) 「視覚を表す自由間接話法の発話について」『明布佛文論叢』 46: pp.1-28. 明治学院大学文学会
- 田原 いずみ (2016) 「発話の主観性と時制-直接法半過去、単純過去、現在の場合」 東郷雄二・春木仁孝編『フランス語学の最前線 4【特集】談話、テキスト、会話』 pp.267-302, ひつじ書房
- 東郷雄二 (2010) 「談話情報管理から見た時制-単純過去と半過去」『フランス語学研究』 44: pp.15-31. 日本フランス語学会
- Vassant, Annette. (1981) Ambiguïté et mésaventures d'une théorie linguistique : Les relations de temps dans le verbe français d'E Benveniste. *L'Information grammaticale* 9 : pp. 13-19. Paris: Heck.
- Vuillaume, Marcel. (1998) Le discours indirect libre et le passé

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

simple. Svetlana Vogeleer, Andrée Borillo, Carl Vettters, Marcel Vuillaume. (eds) *Temps et discours*, pp.191-201. Louvain-la-Neuve: Peeters.

Vuillaume, Marcel. (2000) La signalisation du style indirect libre. Sylvie Mellet et Marcel Vuillaume. (eds) *Le style indirect libre et ses contextes*, pp.107-130. Amsterdam: Rodopi.

横井雅明(2009)「『星の王子さま』に見られる過去時称の切り替えに関する一考察」『アルテス・リベラレス』85: pp.61-67.岩手大学

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。